

Gallery of The Fine Art Laboratory

拝啓 時下ますますご清祥の事とお慶びを申し上げます。

この度、9月3日（木）から9月19日（土）まで、武蔵野美術大学「Gallery of The Fine Art Laboratory」にて、神農理恵「Leg」展を開催いたします。是非ご高覧いただきたく、ご案内申し上げます。

【開催概要】

会期：2026年9月3日（木）～9月19日（土）11：00～17：00 日曜休廊

会場：Gallery of The Fine Art Laboratory

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 武蔵野美術大学2号館1階

主催：Gallery of The Fine Art Laboratory（彫刻学科研究室企画 問い合わせ先：042-342-6055）

※9月3日（木）15：00より2号館202にてアーティストトーク、16：30よりオープニングパーティーを行います。

## 神農理恵「Leg」

ガムテープを巻くと、始まりと終わりができる。一周すると、その二つは重なる。始まりはわからなくなるのに、終わりと継ぎ目の痕跡が残る。

切ったり、つないだり、支えたりするたびに、縦横、前後、上下、あるいは「ここからここまで」といった関係が生まれる。私は物質を変形させているつもりだったが、むしろ、こうした区切りをその都度つくっているのかもしれない。

物質に何度も手を加えていくと、ときどき、介入や意図から逸脱するように、予想していなかった状態が現れる。物質と形態の関係がこちらの認識を追い越し、私は呆気にとられる。

あとから考えれば、素材の性質や作用として説明できることなのかもしれない。だが、その瞬間は可笑しくて、つい手が止まる。

鉄はあたかも紙のようになる。

神農理恵



## 【作家略歴】

神農 理恵／Rie Shinno

2015 名古屋学芸大学メディア造形学部ファッション造形学科 中途退学

2018 名古屋造形大学造形学部コンテンポラリーアートコース 卒業

2020 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻 彫刻コース 修了

1994 年三重県生まれ。東京都在住。

鉄やコンクリートブロックなどの硬質な素材と樹脂や着彩を組み合わせ制作を行う神農理恵は、即興的に素材を裁断、結合、変形することで立体を形づくりします。物質固有のテクスチャーによる無数の重ね合わせの上に、軽やかな色感や形状を取り込み、堅くやわらかで、繊細かつ荒々しいといった両義的なイメージを浮かび上がらせます。

主な展覧会に、個展「Cat runs away from Mouse, Mouse runs away from Cat.」Super Gallery 協力：

Minatomachi Art Table, Nagoya[MAT, Nagoya]（愛知、2026）、グループ展「なめらかでないしぐさ」西尾市岩瀬文庫（愛知、2023）、グループ展「いつかは世の中の傘」TALION GALLERY（東京、2022）、二人展「Heptapod Solresol Ruins」VOU/棒（京都、2022）、三人展「ゆくりか」See Saw gallery+hibit（愛知、2018）など。

主な受賞に、「CAF 賞 2020 名和晃平賞」、「群馬青年ビエンナーレ 2019 入選」、「名古屋造形大学卒展 桃美会賞」がある。

## 【個展】

2026 〈Leg〉 Gallery of The Fine Art Laboratory(東京)

2022 〈Cat runs away from Mouse, Mouse runs away from Cat.〉 Super Gallery / 協力：Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya](愛知)

2018 〈a fresh, pleasant feeling.〉 mime (東京)

## 【主な二人展・グループ展】

2027 二人展 / 郷正助・神農理恵 SPACE NOBI(東京)

2026 〈波・空・川・一〉都里一ビル(東京)

2025 〈内臓のある家〉ソフトハウス三ノ輪(東京)

〈CUT A LOG – VOU/棒 10th Anniversary book – 展〉VOU/棒(京都)

〈SAPPORO PARALLEL MUSEUM 2025〉NOASIS 3.4 日本生命札幌ビル(北海道)

2024 〈今夜、キリマンジャロへ飛ぶ〉東葛西1-11-6 A 倉庫(東京)

2023 〈なめらかでないしぐさ〉西尾市岩瀬文庫(愛知)

〈うららか絵画祭〉The 5th Floor(東京)

2022 〈EXPO PARK ART&MUSIC WEEKEND〉大阪万博公園(大阪)

〈Valeur〉山口由葉・神農理恵 Valeur (愛知)

〈いつかは世の中の傘〉TALION GALLERY(東京)

〈Heptapod Solresol Ruins〉水上愛美・神農理恵 VOU/ 棒 (京都)

2021 〈RISING STARS〉銀座蔦屋書店(東京)

〈The Practice of Alchemy〉TOKYO INTERNATIONAL GALLERY(東京)

〈ストレンジャーによるしく〉箔一ビル(石川)

〈ART@DAIMARU BEAMS × mui Lab〉大丸京都店 (京都)

2020 〈CAF 賞2020〉代官山ヒルサイドテラス(東京)

〈Shift Operation : Tokyo Workflow〉CAVE AYUMI GALLERY(東京)

2019 〈群馬青年ビエンナーレ 2019〉群馬県立近代美術館 (群馬)

2018 〈ゆくりか〉See Saw gallery+hibit (愛知)

〈彫刻と対話法 V カンガルーが走れば〉府中市美術館 市民ギャラリー (東京)

## 【受賞】

2020 CAF 賞 名和晃平賞

2019 群馬青年ビエンナーレ2019 入選

2018 名古屋造形大学卒展 桃美会賞

## 驚いている作品

作品をみる。その作品に対して（理由はわからないが）「いい作品だ」という直感が働いたとしたら、それは何故だろうか。その理由を知るために私たちはさらに目を、身体を動かし、言葉を操り、思考を捏ねくり回す。でも、結局は最初の直感に到達することではなくて、直感からは少し離れたところに理由を落ち着けてしまう気がする。歯痒いなあ。

神農理恵の作品をみている時は、そんな歯痒さを感じない。（結論めいてしまうが）それが最大の魅力だと思う。みる者に直感で向き合うことを作品が求めてくるといえばよいか。「いい」と思ったその先に思考を進ませないのが神農の造形だ。では、何故そうなるのだろうか。ここまでの内容と逆行するように、その「理由」を考えてみたい。

魅力的な色と形が備わっている。滲みやグラデーション、格子やドットといった装飾的なイメージを無防備に曝け出し、半ば暴力的にぶつけ合うことで、強引に全体がまとまっていく。造形が事故のように現れる瞬間を作家は待っているようだ。相手の都合はおかまいなし、といった様子の手つき、素材への働きかけが、色彩の爆発力と形のスピード感を「どうしようもなく」つくり出してしまふ。勿論、身勝手につくっているわけではない、その手つきの裏には作家一流の慎重で繊細な観察眼があるわけだが、それが何故か裏返ってしまうところが面白い。その一連の流れが明々白々、鮮やかであればあるほど、私たちはその造形の前で笑いながら立ち尽くすしかない。神農の最良の作品はそんな経験を備えている。

作品は、徹底的に感覚に訴えるもので、それ以上の深読みをさせないようにつくり込まれている。ここでいう感覚とは、「素材が別の何かに」「平面的な悦びが立体的な快楽に」といった視覚造形の波に私たちが計らずも乗ってしまうことを指している。ただし、私たちだけでなく、実は神農も同じ波に乗っている疑惑が作品からは感じ取れる。その波を起こした責任は誰が取るのだろうか？という「作者不在性」、投げっ放しの解放感と不安感が作品には付き纏っている。深読みをさせないといったが、メッセージや意見が作品にないということではない。作品には作家の「解消不能なサムシング」が含まれている。自らも波に乗ることで、神農はそのサムシングを他人ごととして目撃したいのではないだろうか。客観性などといった大人な物言いではオチがつかない。驚き、慌てることから世界に水をさしたいのだ。造形とは世界に唐突な問いを投げかけることが許されている方法だ、と思う。神農はまさしく造形作家である。

そんな神農に付き合わされている作品も大変である。作品は、きっと自身が展示されていることに、自身が作品と呼ばれていることに驚いている。鑑賞者も作家も作品も同じ波に乗っている。そんなグルーヴ感を巻き起こす神農理恵の作品は「いい」。

富井大裕（美術家、武蔵野美術大学教授）



《dog(big)》

2021

鉄、ラッカー、油性ペンキ  
W274.2 × D365.8 × H178 cm

撮影 | 高木遊



《Cat runs away from Mouse, Mouse runs away from Cat.》  
2022

鉄、ラッカー、油性ペンキ、MDF、木材  
可変

撮影 | 藤井昌美  
画像提供 | Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]



《ブロックにガムテープ(#1 - #14)》  
2018

コンクリートブロック、ガムテープ、クレヨン、パラフィンワックス

撮影 | 棕本真理子



《ブロックにリボン#3》

2021

コンクリートブロック、リボン、クレヨン、パラフィンワックス  
W19 × D10 × H19 cm

撮影 | 松尾宇人



《ブロックにリボン#5》

2021

コンクリートブロック、リボン、クレヨン、パラフィンワックス  
W18 × D7 × H15 cm

撮影 | 松尾宇人